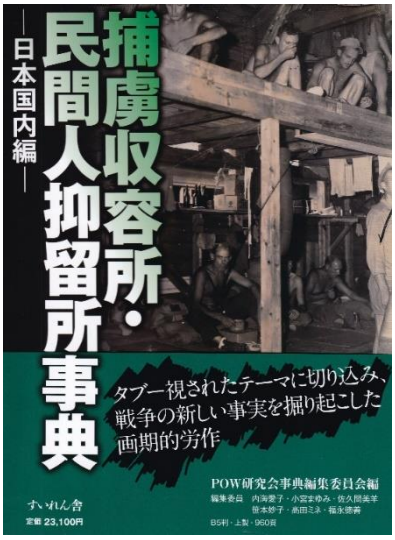
『捕虜収容所・民間人抑留所事典』完成！

昨年 12 月 20 日、7 年がかりで取り組んできた『捕虜収容所・民間人抑留所事典』がようやく刊行されました。2002 年の P 研発足以来（人によってはそれ以前から）、会員たちが地を這うようにして重ねてきた調査研究の集大成であり、捕虜や抑留者の全体像を初めて明らかにした画期的な研究書であると自負しています。995 頁、厚さ 4.7 ㎝、重さ 2.5 kgに及ぶ大冊となりました。



事典外函の表側

2023 年 12 月 20 日、ついに『捕虜収容所・民間人抑留所事典』を手にしたＰＯＷ研究会メンバー。（梨の木舎にて）

本書の構成

本書の構成は以下の通りです。

１．刊行にあたって……事典編集委員会

２．この事典の編集方針……内海愛子（13～18 ページ）

３．総論：捕虜、その処遇を巡る「闘い」……内海愛子（19～80 ページ）

４． 本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士……福林徹（故人）（81～98 ページ）

５． 捕虜収容所（99～634 ページ）

概説：日本国内の捕虜収容所……笹本妙子

捕虜収容所 130 か所のレポート…藍原寛子、稲塚由美子、井上拓也、沖田信悦、木村昭雄、木村英昭、古牧昭三、佐久間美羊、笹本妙子、須佐多恵、高田ミネ、田村佳子、西里扶甬子、原英章、福永徳善、村田則子、渡辺洋介

６．民間人抑留所（635～786 ページ）

概説：アジア太平洋戦争下の民間人抑留……小宮まゆみ

民間人抑留所 29 か所のレポート……小宮、編集委員会

軽井沢の外国人疎開のレポート……高川邦子

7. コラム 16 本……井上拓也、小宮まゆみ、笹本妙子、高田ミネ、田村佳子、福永徳善（155～698 の

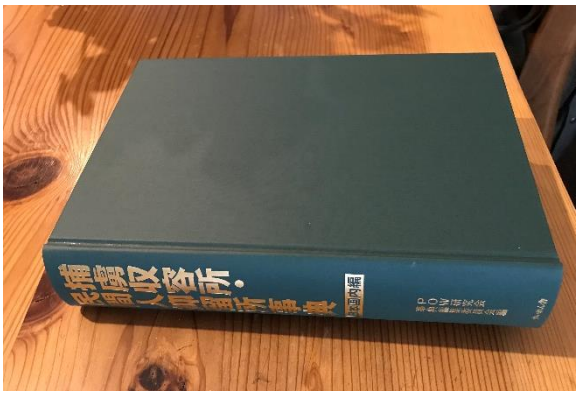
間に散在）

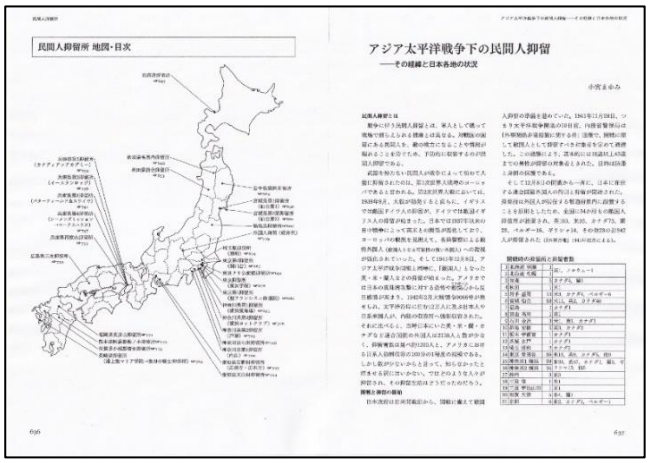
8．参照資料一覧（787～899 ページ）

9．付属資料（ジュネーブ条約、外地捕虜収容所、捕虜輸送船全リスト、その他）（901～956 ページ）

10．索引（人名・地名・事項）（957～992 ページ）

11．あとがき……事典編集委員会（993～995 ページ）





本書へ込めた思い

私たちが本書に込めた思いを、「刊行にあたって」と「あとがき」から抜粋します。

「調査を進める中で私たちが痛切に感じたのは、この問題の根の深さであった。過酷な捕虜生活の中で命を落とした人々だけでなく、生きて故国に帰った人々も心と体に深い傷を負い、日本への強い怒りと憎しみを抱きながら戦後の日々を生きてきた。その傷は子や孫へと受け継がれている。一方、日本人の側にも大きな傷を残した。必ずしも公正とは言えない戦犯裁判で、多数の日本人が捕虜虐待の罪で裁かれ、絞首刑などの厳罰に処された人も多い。残された遺族は戦犯の汚名を背負いながら、生活苦と闘わなければならなかった」。

「捕虜や抑留者の問題はあの大きな戦争の中では小さな一断片に過ぎなかったが、私たちはこの調査を通して、その一断片がもたらした傷の大きさと深さを知ることになった。ひとたび戦争が起これば、ありとあらゆる人がその渦に巻き込まれ、翻弄され、計り知れない傷を負うということを知っておきた

い。そして戦争を食い止めるための努力をしていきたい。本書がそのための一助となれば幸いである」。

「長年の調査研究によって掘り起こされた捕虜収容所・民間人抑留所の歴史が、本書の出版によって多くの人に共有される歴史となり、後世に語り継がれるものになることを願っている」。

刊行までの経緯

この本の出版プロジェクトは 2016 年初頭に、会の活動として「国内にあった捕虜収容所や民間人抑留所のガイドブックのようなものを作りたい」という案が出されたことから始まりました。しかしこの種の本は自費出版するしかないように思え、それを実現するのは遠い道のりに思えました。ところがＰ研会員で出版社「すいれん舎」を経営する高橋雅人さんに相談したところ、公共図書館や大学向けの『事典』としてなら商業出版も可能で、すいれん舎で引き受けても良いと言ってくれました。

そこで会員に呼びかけて執筆者を募り、20 数人が名乗りを上げてくれました。しかしプロジェクトの中心となるべき共同代表の福林徹さんは、本よりもホームページで発信した方が、間違いや発見があった時すぐに更新できるし、戦犯裁判の問題に首を突っ込んだら泥沼にはまって抜け出せなくなるのではと慎重でした。それでも福林さんを説得し、何とかスタートに漕ぎつけたのが 2016 年の夏、9 月 3 日に第 1 回の編集会議を開き、10 月 1 日に執筆者が集まって初めての勉強会を行いました。編集者はすいれん舎の石原重治さんで、Ｐ研会員にもなってくれました。

ところが、それから間もなく福林さんが体調を崩し、原因不明の病気で翌 2017 年 8 月 31 日に亡くなってしまいました。私たち大きなショックを受け、悲しみにくれました。それでも福林さんが担当するはずだった収容所の原稿は他の執筆者に振り分け、弟の福林満さんのお許しを得て、膨大な資料を京都府亀岡市の福林さんのお宅から、当会が拠点としていた東京の大阪経済法科大学麻布台セミナーハウスに運び込みました。これを整理して、各収容所の担当執筆者に関係資料を送り、2018 年には 5 回、2019 年には 7 回の勉強会を行いました。しかし 2019 年 6 月に麻布台セミナーハウスが突然閉鎖されて、私たちは膨大な資料の保管先を探して、やっと神田駅近くの古い建物の 1 室を借りて資料を運び込みました。

2020 年に入ると、コロナ禍のため大勢が集まる勉強会が開けなくなったので、書き上がった人の原稿を、編集委員の内海、小宮、佐久間、高田、福永、笹本による編集会議で検討する方法に切り替えました。水道橋、有楽町、本郷などの会合場所を転々としながら、9 回の編集会議を開きましたが、その間、2020 年 10 月 5 日の朝日新聞夕刊に『事典』のことが紹介され、このプロジェクト進展の大きな弾みとなりました。2021 年にはオンラインで 8 回の編集会議を行いましたが、その前年の暮れごろから編集の石原さんの体調が悪化し、『事典』への思いを残しながら 5 月に亡くなられました。

オリンピック青少年センターでの合宿編集会議。2023 年 8 月

福林さんに続いて大事な人を喪い、私たちの痛手は大きかったのですが、気を取り直して再スタートを切り、2022 年のオンライン編集会議は計 23 回とピッチを上げました。その間、4 月には資料を保管していた神田の建物から立ち退きを迫られ

るという難事に遭遇しましたが、幸い資料は梨の木舎の一角に間借りさせてもらうことができ、新たな編集者には剛腕との名が高い山本規雄さんが来てくれました。

彼は 2023 年内には何としてでも完成させると宣言して、綿密なスケジュールを立て、30 回近いオンライン編集会議の他、8 月にはオリンピック青少年センターで 2 泊 3 日の強化合宿まで行いました。筆が進まずモタモタする私たちを叱咤激励し、記述の矛盾や不適切な表現、出典表記の甘さを鋭く指摘し、見事に本書をまとめ上げ、宣言通り 12 月 20 日の刊行を成し遂げたのです。私たちは「鬼軍曹」と言いつつ、その能力に圧倒され、敬服し、感謝するばかりでした。

感謝とお願い

執筆者の皆さんには、コロナ禍で現地調査や資料調査もままならない中、様々な資料や情報を集め、誠意をもって原稿を書いて下さったことに深く感謝しています。

執筆者以外のＰ研会員の方々にも、さまざまな形でご協力いただきました。オランダ在住の中沢陵子さんにはオランダ人捕虜の名前の読み方などで、イタリア文学が専門の土肥秀行さんにはイタリア人の名前の読み方などで、キャンベラ在住の田村恵子さんにはオーストラリア捕虜の写真や資料で、たいへんお世話になりました。戦中の軍組織や艦船、航空機などに関する知識では菅原完さんに助けを求め、それぞれに的確なアドバイスをいただき、本当にありがたく思いました。

最後に、本書の刊行を勧め、素晴らしい本に仕上げて下さったすいれん舎の高橋さんに心からお礼を申し上げます。多くの人の支えによって完成したこの『事典』が、埋もれていた郷土の歴史を知る資料として、戦争と平和を考えるための材料として、多くの人に読み継がれていくことを願っています。

今後も図書館などに購入してもらえるよう、皆様からの推薦をどうぞよろしくお願い致します。

【本書についての新聞報道】
朝日新聞 2023.12.25 夕刊
毎日新聞 2023.12.26 デジタル
神奈川新聞 2024.1.14
1 面と 19 面
毎日新聞 2024.1.27 ひと欄
東京新聞 2024.2.14
読売新聞 2024.2.16
TROUW（オランダの新聞）
2024.2.20
（今後も中国新聞その他に記事が掲載される予定です）

捕虜収容所の姿 後世へ

民間グループ 20年超の調査 事典に

トラウマ・抑留・強制疎開…

アジア・太平洋戦争のさなか、国内各地には約130カ所の捕虜収容所と、多くの外国籍の民間人抑留所があった。どの国から何人が連れて来られ、どんな生活を送っていたのか。何人が死亡したのか。民間のグループが20年以上かけて丹念に調査してきた結果が今月、1千ページ近い事典として出版された。埋もれていた歴史を市民の手で掘り起こす作業だった。

出版されたのは「捕虜収容所・民間人抑留所事典―日本国内編―」（すいれん舎）。2002年から戦争捕虜（Prisoner of war）の調査を続ける市民団体「POW研究会」が編集委員会を作り、発刊にこぎ着けた。

同会は、米国の公文書や元捕虜、日本人関係者らへの聞き取りや調査を

POW研究会のメンバー。右から、笹本妙子さん、小宮まゆみさん、高橋雅人さん、高川邦子さん＝東京都千代田区

終戦直後の仙台俘虜収容所第3分所（梨の木鉱山）での捕虜の食事風景＝米国立公文書館所蔵、工藤洋三さん提供

連合軍の将兵 3.5万人を連行

POW研究会の調査によると、戦時中に日本軍はアジア・太平洋地域で約16万人の連合軍の将兵を捕虜とし、3万5千人を超える捕虜を労働力不足を補う要員として日本に連行した。

国内各地に約130の捕虜収容所が造られ、捕虜たちは炭鉱や鉱山、造船所、工場などで働かされた。病気や飢え、暴力などが原因で亡くなった捕虜も多く、戦後、収容所関係者がBC級戦犯に問われた。

日本国内にいた外国籍の民間人も「敵国人」として次々と全国各地の抑留所に収容された。同会の調査で、短期間のものを含め延べ52カ所あったことが確認されている。

朝日新聞　2023 年 12 月 25 日夕刊

（笹本妙子、小宮まゆみ記）